

## 特集アーカイブ

### ■ 目次

---

2023年ハイライト	CO <sub>2</sub> 削減に向けた取り組み	2 / 16
2022年ハイライト	サステナビリティ推進体制	6 / 16
2021年ハイライト	SDGs委員会	9 / 16
2020年ハイライト	SDGs対談	14 / 16

※ 各特集の掲載内容については、制作時点の情報になります。



## 特集 CO<sub>2</sub>削減に向けた取り組み

リンテックグループでは、長期ビジョン「LSV 2030」の重点テーマの一つに「社会的課題の解決」を掲げ、環境への取り組みを全社一丸となって進めています。今回は「2050年までに"カーボンニュートラル"を実現」を目指したCO<sub>2</sub>排出量削減対策や「VOC(揮発性有機化合物)の大気放出抑制(2030年までにゼロ)」に対する、生産・研究・営業における取り組み事例の一部についてご紹介します。

### 生産本部

#### 長期ビジョンに沿った設備投資計画の策定

リンテックグループではCO<sub>2</sub>排出量削減を重要課題と捉え、生産設備面からもさまざまな施策を行っており、長期ビジョン「LSV 2030」の中期経営計画に合わせ、海外グループ会社も含めたグローバルな設備投資計画を策定・推進しています。「LSV 2030 - Stage 1(2021~2023年度)」では、自家消費型太陽光発電システム導入や各種生産設備の改善などに約88億円「LSV 2030 - Stage 3」の最終年度となる2029年度までには総計約195億円の投資を予定しています。また、排出量削減と同時に、企業として費用対効果の追求も視野に検討を進めています。

#### Stage 1 (2021~2023年度)

- サイザー\*1やシュープレス\*2、自家消費型太陽光発電、RTO設備へ排熱ボイラ導入など、コストダウン効果も見据えた計画の実施
- ユーティリティー関連のデジタル化を推進し、一元管理(可視化)ができるような設備計画の立案
- 再構築計画実施によるCO<sub>2</sub>排出量の増加や、省エネ計画(1.0%削減)によるCO<sub>2</sub>削減量も加味した計画の立案

#### Stage 2 (2024~2026年度)

- 都市ガス化など継続案件となった、ガスコージェネ(GE設備など)システムの導入やVOCの全量処理に向けた直燃式ボイラ導入の計画推進
- 電力価格や電力係数の状況を確認しながら、グリーン電力などの契約推進

#### Stage 3 (2027~2029年度)

- メタネーション・水素など新たな燃料への転換に向け情報を注視し検討
- 太陽光発電(売電:20年)の自家消費型への切り替えも視野にエネルギーバランスの最適化

\*1 サイザー：軽量コーティング(シートの表面に必要なだけ薬品を塗工)するための設備。乾燥時間の短縮となり、ドライパートでのエネルギー使用量の削減につなげることができる。

\*2 シュープレス：脱水方法の改善によって、シートに含まれる水を従来よりも多く搾り取ることができる設備。ドライパート(乾燥工程)でのエネルギー使用量の削減につなげることができる。

#### 特殊紙生産設備をはじめとする2022年度の導入実績

2022年度のCO<sub>2</sub>排出量はリンテックグループ全体で177,928t-CO<sub>2</sub>となっており、2013年度比で39.7%の削減となりました。特に、特殊紙の生産では抄紙機の乾燥工程で多くのCO<sub>2</sub>が排出されるため、主力生産拠点である熊谷工場(埼玉県)にはシュープレスを、三島工場(愛媛県)にはサイザーを導入したことで、今後さらなるエネルギー使用量とCO<sub>2</sub>排出量の削減が期待されます。



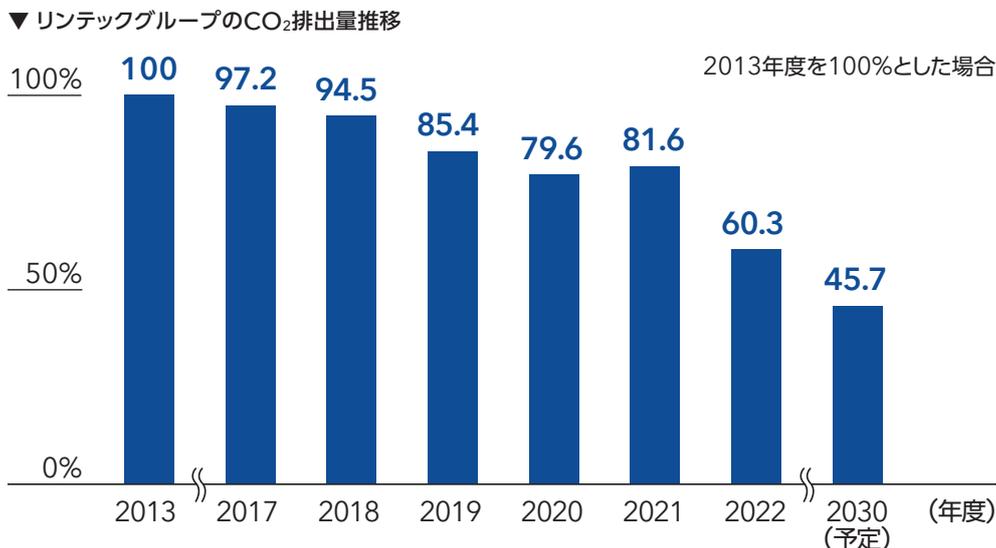
熊谷工場に導入された太陽光パネル



リンテック株式会社

特集：CO<sub>2</sub>削減に向けた取り組み

また、自家消費型太陽光発電システム導入にも注力しており、2022年度は龍野工場、熊谷工場、土居加工工場、小松島工場へ導入し、年間約1,000t-CO<sub>2</sub>の削減効果を見込んでいます。これにより国内ほぼ全ての生産拠点で導入が完了していますが、今後も可能な限り導入を進めていきます。他にも生産工程の見直し、排熱回収方法の刷新、高効率ボイラの導入や無溶剤化対応などCO<sub>2</sub>排出量削減に向けてさまざまな施策を実施しています。



## 目標達成に向けて

「LSV 2030 - Stage 1」の最終年度となる2023年度は、Stage 2、3に向けさらなる効果的な削減対策を実行できるよう、削減量実績のレビューや各生産拠点でのヒアリングを行い、計画の見直し・最適化を目指します。同時に、今後各拠点で予定されるビルド&スクラップによる省エネ、高品質、高効率、省人化を目的とした生産プロセスの革新に伴う排出量増加については、事前に抑制するための対策を検討しています。また、2030年までの目標達成を前に、一部の生産拠点でカーボンニュートラル実現を計画しています。今後、さらに高まる要求にも対応できるよう、リンテックグループ全体として積極的に取り組んでいきます。



生産本部  
寺川 公明



## 研究開発本部

### 求められる環境対応と開発推進

地球温暖化や大気・水質汚染など、環境対応に関する言葉を頻繁に目や耳にするため、以前よりそれらに対する意識は高まっています。

いわゆる研究・開発業務は、要求されるもしくはされるであろう性能を、許容されるコストで製造することを価値とするものだと見ることができます。それは製品が持っているなければならない価値となりますが、そこに環境対応という付加価値を加える必要があると考えています。

例えば、全ての構成部材を同一の組成とするモノマテリアル化によって易リサイクル性を付与したり、バイオマス材料で代替するなどです。また、これは私の担当するテーマや研究室に限ったものではありませんが、実際のCO<sub>2</sub>排出量を低減するために、粘着ラベルの構成材料である基材の薄膜化や粘着剤の低塗布量化なども挙げられると考えています。さらに、製造工程内で使用する有機溶剤を低減したり、それを水で置き換えたエマルジョン化をするなど、製品から直接わかることのない部分においても環境対応を行っています。

### 脱有機溶剤によってCO<sub>2</sub>削減に寄与するリンテックのホットメルト粘着剤の開発

環境対応といってもさまざまな手法や手段があります。開発した「HVT」シリーズは、その中でも製造工程で有機溶剤を使用しないホットメルト粘着剤\*というものになります。

エマルジョン化した粘着剤は、環境対応という観点において有機溶剤を使用しないという点は長所と言えますが、どうしても粘着剤層を厚くしなければならない場合に、製造が非常に難しいという短所があります。その一方で、ホットメルト粘着剤は粘着剤層を厚くする場合に製造が容易になるという長所があるため、それぞれを適切に使い分けることで幅広い製品の領域をカバーできるようになります。



環境負荷の少ないホットメルトタイプのラベル素材「HVT」

\* ホットメルト粘着剤：粘着剤を熱で溶かしながら塗工する粘着剤処方。塗工時に有機溶剤を使用しないため環境負荷が少なく、乾燥設備が不要でCO<sub>2</sub>排出量が少ないのが特徴。

### 目標達成に向けて

これまでに述べてきたように、脱有機溶剤の検討を継続するほかにも、バイオマス材料を積極的に選定し、基材の薄膜化や粘着剤の低塗布量化などの開発を継続していくことはもちろんですが、より環境対応に配慮した製品に代替することを提案できるような開発を行っていきたいと考えています。私が開発を行っている製品は、実際に日常で目にしたり手に触れることが多いので、例えば「この用途であればプラスチック製のものを紙製のものに代替しても問題になることはない」といったことを自分で感じることができます。こういった日常の経験も活かしながら、継続的な環境対応製品の開発を行っていきたいと考えています。



研究開発本部 研究所  
製品研究部 粘着材料研究室  
露崎 貴宏



## 事業統括本部

## 広がる顧客要求に合わせた環境配慮製品の提案

持続的な社会の実現に向けて、環境配慮への意識が高まり、さまざまな製品に貼られるラベルにも環境にやさしいものが欲しいというニーズが増えてきています。

環境負荷が少ないラベル材料と一口に言っても、リサイクル材料の活用、プラスチック使用量の削減(減プラ)/紙材料への置き換え(脱プラ)、バイオマス(生物由来)材料の活用など、求められる環境負荷低減のアプローチは数多くあります。リンテックではお客様の求めるさまざまな環境負荷低減にお応えするため、例えば飲料用PETボトルをリサイクルしたカインナスKPシリーズや、耐洗紙の技術を活用したプラスチック代替ラベル材料のプラレスシリーズなど、さまざまな低環境負荷ラベル材料をラインアップしています。

## 脱溶剤製品の拡充を促進

特に問い合わせが増えているのがCO<sub>2</sub>排出量の削減に関するものです。当社での取り組みとして、特に力を入れているのが製造段階で使用する有機溶剤の使用量削減です。粘着剤の脱溶剤化の取り組みの一例として、2020年に米国子会社のマックタック・アメリカ社が開発したホットメルト粘着剤「CHILL AT」を用いた製品群を日本国内で販売開始しました。冷蔵・冷凍環境で貼り付け可能といった粘着性能面に加え、溶剤系粘着剤を用いた製品と比較し、材料および製造段階でのCO<sub>2</sub>排出量が少ないという環境性能をご評価いただき、採用いただいた事例もあります。また、CO<sub>2</sub>排出量削減を考慮した製品へのニーズが増えてきており、ホットメルト粘着製品がお客様への価値の提供(顧客満足)につながっていることを実感しています。さらに、2023年には当社が独自開発した新規ホットメルト粘着剤「HVT」を用いた製品群の販売を開始しました。「CHILL AT」が低温環境での貼付性に優れるのに対し「HVT」は常温から高温までの貼付性に優れた日用品や化粧品、医薬品など、より広い用途に使用可能な製品となっています。



凍結・結露面への貼付に適したチルド環境対応ラベル素材「CHILL AT」

## 目標達成に向けて

今後、脱溶剤化以外の低環境負荷製品の取り組みとして減プラにつながる使用材料の薄膜化や、剥離紙リサイクルなどに取り組んでいきます。また、当社ではラベル材料だけでなくラベリングマシンの開発も行っており、これまで困難とされてきたPET12μm基材を使用したラベルの貼付を可能にした薄膜ラベリングマシンの提案を行っています。この薄膜ラベリングマシンに対応した薄膜ラベル材料の開発、提案に注力していく予定です。また、ラベルを使用した後は廃棄物になってしまう剥離紙の回収、再生・再利用の検討を進めています。



事業統括本部  
技術・開発室 企画開発グループ  
宮崎 健太郎

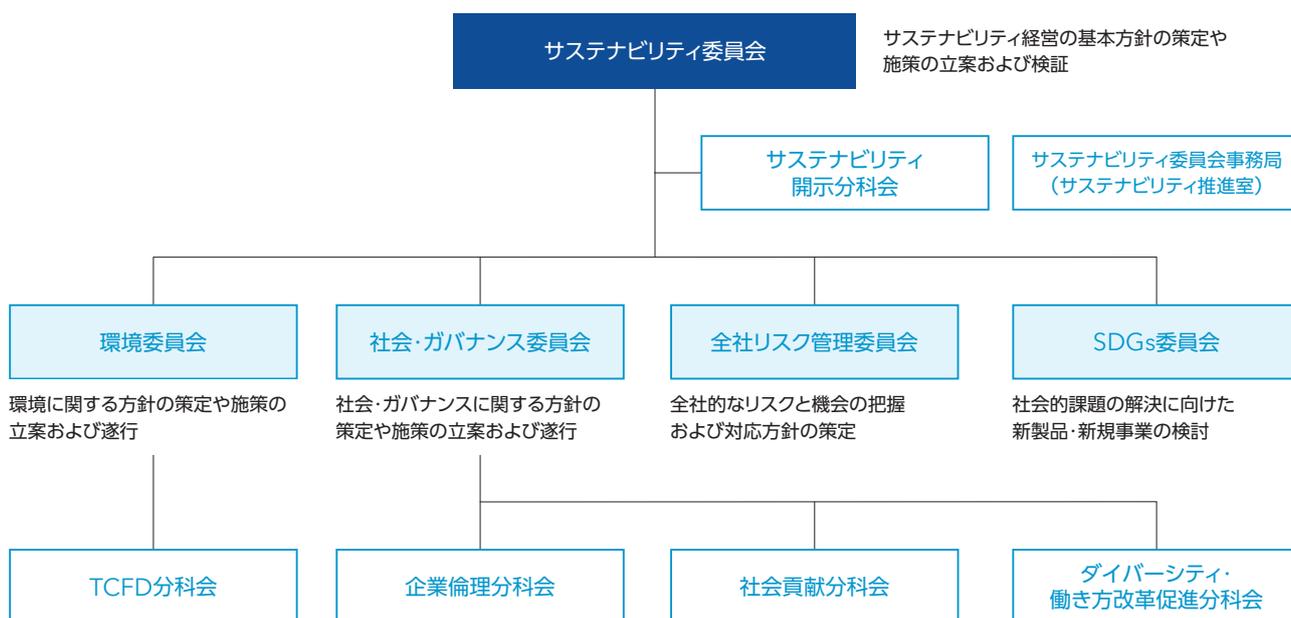


## 特集 サステナビリティ推進体制

リンテックグループでは、2021年4月に2030年に向けた長期ビジョン「LINTEC SUSTAINABILITY VISION 2030」を掲げ、この実現のために社外取締役も参画するサステナビリティ委員会を設置しています。

さらに委員会および分科会の新設と再編を行い、サステナビリティ推進体制を構築、運営しています。2022年4月現在、5委員会、5分科会で構成されています。

### サステナビリティ推進体制 (2022年4月1日現在)



### サステナビリティ委員会

サステナビリティ経営推進のための基本方針策定、各委員会・分科会の施策の進捗レビュー、モニタリングおよび改善指示を行いました。さらにLSV 2030の実現に向け特定、見直しされたマテリアリティ(重点課題)の精査・承認、TCFDの提言に沿った情報開示への対応として新規分科会の設置、開示案策定活動に対する指示を行いました。2021年度はオンライン会議を併催のうえ3回(7、10、1月)開催し、社外取締役を含む委員14名の出席率は100%でした。

### サステナビリティ開示分科会

各種適時開示資料やPR誌、ウェブサイトなどを通じてのステークホルダーへの迅速かつ効果的な情報開示、中でもサステナビリティ経営に関わる社内外への発信情報の一層の充実に努めました。また、外部評価機関の調査への回答、経営層



特集：サステナビリティ推進体制

への評価結果のフィードバックの徹底などにも取り組んできました。2021年度は1回(3月)、オンライン参加を含め開催したほか、必要に応じたメンバー間での情報交換・共有というスタイルで活動を推進しました。

## 環境委員会

当委員会では、持続可能な社会を目指し“気候変動・循環経済・自然共生”の環境課題について「リンテックグリーンプラン」の策定を行い、LSV 2030の実現に向けて活動を行っています。特に2021年度は、脱炭素化に向け、リンテックグループとして2030年にCO<sub>2</sub>排出量削減率50%以上(2013年度比)を達成するため、国内に加え、海外の製造拠点および営業拠点のCO<sub>2</sub>排出量調査を実施、省エネルギー推進委員会、生産本部、研究所などの関係部署と連携して国内・海外のCO<sub>2</sub>排出量削減計画の策定・推進を進めてきました。2021年度は3回(9、12、2月)開催し、環境に関する方針策定・施策の立案および進捗管理を実施。また、12月に環境委員会の下に「TCFD分科会」を新設「TCFD提言」に沿った情報開示に向けて、気候変動に対するリスク・機会の特定・対応策の検討を進めています。

## TCFD分科会

株式市場再編に伴い、プライム市場上場企業には「TCFD提言」に沿った情報開示が必要になることから、2021年12月に環境委員会の下に「TCFD分科会」が新設されました。12月から2月の期間で2030年の国内事業を対象に「TCFD提言」のフレームワークを参考に移行リスク(政策・法規制、技術、市場、評価)、物理リスク(急性・慢性)の特定および開示案の策定を進めてきました。また、特定した「リスク・機会」については、外部資料を活用して将来、地球温度が2℃、4℃上昇した場合の事業影響について「シナリオ分析」を行い「TCFD提言」に沿った初年度開示案の策定を進めてきました。次年度は新メンバーを加え、特定した「リスク・機会」について深掘りを進めていく予定です。

## 社会・ガバナンス委員会

ESGのS(社会)とG(ガバナンス)に関する会社の取り組みの進捗を四半期ごとにチェックしています。2021年度は、「65歳定年制度」「70歳までの再雇用制度」「時間有休制度」などの導入や「指名・報酬委員会」の設置(コーポレートガバナンス委員会からの発展的改組)が計画通り進捗したことを確認しました。

また、「グローバルでの内部通報制度の見直し」や「日本・米国での人権調査・従業員満足度調査の導入」などの準備を進めています。

## 企業倫理分科会

企業倫理の醸成と浸透・定着を目的に活動しています。2021年度は分科会を4回開催し、以下テーマ毎にワーキンググループ活動を行い、全社員を対象とした企業倫理の浸透を議論し、情報発信と教育の場の提供を行いました。

1. リンリかわら版	イントラネットに「行動規範」に関連する川柳を月次掲載(11回)、川柳コンクール開催(12~2月)
2. 倫理意識向上ポスター	2021年度版「多様な仲間と繋がるコミュニケーション」の作製・配付、2020年度版「コロナ禍におけるコミュニケーション」のイントラネットへの掲載、e-ラーニングアンケート実施
3. 情報セキュリティ自己監査	e-ラーニングの実施、結果の集計と報告
4. 他社事例から学ぶ企業倫理	テーマを決め事例集を作成、事業所長宛配信、イントラネット掲示板掲載(2回)



リンテック株式会社

特集：サステナビリティ推進体制

## 社会貢献分科会

当分科会は、地域社会および国際社会における良き企業市民として、社会の持続的発展に寄与する身の丈にあった社会貢献活動を推進することを目的としています。2021年度はオンライン会議を併催のうえ4回(6、9、12、3月)開催し、活動内容について協議しました。残念ながら、毎年行われてきた「障がい者の方々などをお招きする野球観戦」や「ふれあいコンサート」はコロナ禍により中止となりましたが、板橋区社会福祉協議会主催食品配付会を通じ、防災備蓄食料品の提供やクリスマス前にはフライドチキンと交換できるギフトカードを提供するなど、今できる活動を実施しました。

## ダイバーシティ・働き方改革促進分科会

当社の「ダイバーシティ・働き方」について、社内外のニーズの吸い上げ、および施策や制度の浸透と啓蒙活動による企業体質強化へ寄与することを目的として、「社会・ガバナンス委員会」の直下に「ダイバーシティ・働き方改革促進分科会」を2022年4月1日に新設しました。月1回のペースで分科会を開催し、制度をつくるのは人事部の役割、ニーズを吸い上げ、制度の浸透と啓蒙活動を行うのが本分科会の役割と位置づけ、人事部と本分科会の両輪で活動を回していきます。

## 全社リスク管理委員会

リンテックの本部長と社長直轄組織の室長で構成されている当委員会は、「事業におけるリスクと機会の把握、対応方針策定、職制への落とし込みおよび検証」を目的に活動しました。定期リスク洗い出しおよび委員からの持ち寄り議題から、事業におけるリスクと機会を把握し、対応方針を協議しました。協議結果はサステナビリティ委員会および取締役会へ報告、受けた指示を職制へ落とし込んでいます。

## SDGs委員会

新たなビジネスアイデアを創出するイノベーショングループとビジネスアイデアを深掘りするブラッシュアップグループの2グループで構成しています。多様なメンバーが今までにない自由な発想をできるようチームビルディングに注力しつつ、オンラインでレクチャーとグループワークを繰り返しました。日本語と英語での壁新聞発行に加え、メンバー上長と双方向で進捗共有する新たな試みも開始し、SDGsを当たり前にしていくための活動を推進していきます。



リンテック株式会社

# 特集 SDGs委員会

## グループ全体で取り組む社会課題解決に向けたSDGs活動



リンテックグループは、社是「至誠と創造」を根幹に、SDGs\*を経営に組み込み、本業を通じて社会課題の解決に貢献できるよう努めています。SDGsの目標達成に向けてグループ一丸となった活動へ発展させるため、SDGs委員会と西日本分科会が積極的な取り組みを進めています。

\* SDGs : Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)の略称。2015年に国連で採択され、17の目標と169のターゲットで構成。2030年を目標年に、国際社会共通の目標として、世界中の国やさまざまな主体が、より良い世界の実現に向けて議論を交わし、行動を起こしていくことが期待されている。

## これまでの取り組み

2015年度にリンテックで開始した「攻めのCSRワークショップ」を前身に、2018年度にSDGs委員会を発足しました。事業を通じて社会課題を解決することで、リンテックの中にイノベーションを起こすことを狙いとしています。リンテックグループにとって、イノベーションは社是である「至誠と創造」の「創造」に当たる活動です。顧客の一步先に行く提案のためには、社会課題から先読みして対応していく必要があります。

SDGs委員会は、研究、生産、営業など幅広い部署のメンバーで構成しています。メンバーはゼロからメガトレンド\*やSDGsについて知識を身につけていきました。また、少人数のチームに分かれ、SDGsをヒントに新規ビジネスや既存事業の新展開などを考案し、委員会でレビューとブラッシュアップをしました。こうした活動で得た学びをメンバーが各部署に持ち帰り、伝道師としてSDGsを社内に浸透させていくことにつなげています。

\* メガトレンド：世界的な社会の潮流。



## SDGs委員会メンバーの声

本社で勤務していると他拠点・他部署の人との接点が少ないため、委員会でバラエティーに富んだ人、自分にとって新しい人との出会いに恵まれました。委員会で会った人はリンテックグループのごく一部なので、社内にはおもしろい考え方をする人がより多くいると思います。そのような人達が集まれば、より多くのこと、おもしろいことができそうだと思います。

委員会では、多くの知識を身につけなければなりません。しかし、チームで活動するようになって、足りない知識や手法に気が付くと、自然に調べたり勉強したりしている自分がいました。勉強して知識を取り入れて活かすことが好きなのかなと気が付きました。

初めてバックカスティングの話聞いたとき、未来が見えないのにどうやって考えるのだろうか、そもそもどういう意味なのかが分かりませんでした。やりたいことを考えれば良いと気が付いてからは活動が楽しくなり、バックカスティングの有用性を実感しました。しかし、チーム以外の周りの人に同じことをしてもらおうとするとフォアカスティングになってしまう経験が何度もあり、苦労しました。

SDGsを起点としたビジネスを考える際には、自分なりにになりたい姿や理想像を持っておいた方が良いと思います。長期ビジョンの策定に関わりましたが、最終的にどのような状態になっているのが良いかを考え出すのがとても難しいです。「どうなっていたいのか」を持っていくと、物事を進めるときにスムーズに進むと思います。



経営企画室  
勇崎 絵里

今回はオンラインで学習から報告まで完結させるという初めての経験でした。その中でも一週間リーダーを経験することで意見の吸い上げ方、まとめ方等を試行錯誤しながら身につけられたと思います。

順番にリーダーという立場になることで、全員の意見が反映できるチームに仕上がったと思いました。オンラインでは発言のタイミングを計れず話せない方もいるかもしれませんが、リーダーとなれば話す機会を必然的につくるのが可能です。また、各人の作業負担が分担できたこともよかったです。私のチームは、オンライン飲み会でかなり打ち解けました。飲み会ではなくても、少人数で雑談をする会があるとかかなり違うと思います。

オンラインミーティングをすると、時間を雑談に割くのは良くないのかなと感じてしまうこともありましたが、オンラインで活動するためにはチームビルディングの時間や機会が通常より必要だと感じました。

バックカスティングで社会、そしてリンテックのあるべき姿を描きましたが、不確かな未来の姿を描くことは難しく、現状から考えるフォアカスティングの要素が強くなっていくことに苦労しました。改めてバックカスティングを強く意識して考え直すと、今度はリンテックとのつながりが全く見えてこない、説得力がなくなってしまう、そんな葛藤をチームで何度も繰り返していきました。バックカスティングを用いてあるべき姿を描くことは、チームが、そしてリンテックがSDGs活動を通し貢献していくために重要な事柄と捉えて時間をかけて行いました。



龍野工場 製造技術課 製造部  
祝 菜央



人付き合いが得意な人、数値に強い人、ITに強い人、それぞれ異なる強みやスキルを持つ人が集まり、一つのことに取り組む機会を楽しむことができました。今回はSDGsというテーマで集まりましたが、ほかのテーマでもそれぞれ異なる強みやスキルを持つ人が集まることで、おもしろいことや今までではできなかったことができるようになる可能性があると感じました。私はもともと人見知りで、今までは日常や仕事で必要最低限の人としか交流できませんでした。しかし、初めて会った人とも意外と関係を築けることに気が付き、人と関わるのが少し好きになりました。委員会を通じて、人と話すことを苦に感じなくなってきた自分を発見できました。

SDGs委員会では、未来からバックキャストिंगをしながらアイデアを考えるようにしていました。数人で起業する場合であれば、未来のありたい姿を共有しやすく、計画が多少粗くても進められると思います。しかし大きな企業の中で同じことをする場合、承認を得るために、また実現に向けて大勢の人を巻き込んで進めるために精緻に計画を立てているうちに、気が付くとフォアキャストिंगになっていました。実現したい未来はあっても、そこまでが遠すぎて、実際に動かせるところに手を付けるとフォアキャストिंगになってしまう部分に難しさを感じました。



研究開発本部 研究所  
新素材研究部 デバイス材料研究室  
上村 和恵

各部署から人が集まり、一つの大きな目標であるSDGsの達成へ向けて動く中で、本当に多様な人がいることに気が付くことができました。他部署というだけではない違いを感じました。壮大なゴール達成に向けて活動することを大きいと見る人、小さいと見る人、価値が高いと思う人、そのようなことをしてどんな意味があるのかと思う人、そのようなさまざまな考えを持つ人が集まり、一つのゴールへ向けて取り組む物語を見ることができたと感じます。

また、自分が変わった点も発見しました。委員会を通じてSDGsをより深く知ること、日常の中でもSDGsへつながる取り組みを考えるようになりました。私のチームは目標5の達成を考えていますが、ほかの目標も日常生活の中で意識をしたり、考えたりする習慣が自然に身につきました。

自らやりたいと思って見る世界と、やらされて見る世界は全く違うと思います。SDGsは、突拍子もない発想の転換などが起きない限り、達成できないと思います。それに気が付くためには、自ら視界を変えていく必要があると思います。これも委員会を経験して発見したことだと思います。

バックキャストिंगについては、未だに難しいと思うことが多々あります。バックキャストिंगで考える世界は、どんどん変わっていくように感じます。一度、ある時点でバックキャストिंगでありたい姿を描いても、到達へ向けてアクションを考えスケジュールを立てた瞬間に、フォアキャストिंगになってしまいます。しかし、世界は常に変わっていくため、動き続ける未来を見ながら、方向修正を繰り返す必要があると思います。目標が決まるとどうしてもそこへ行きたくなくなり、そのときはフォアキャストिंगになっています。未だに調整(方向修正)はまだうまくできていないと感じており、苦労しています。チームとしては今のありたい姿を良いと思っていますが、世界は日々変わっていきます。私たちの描いた世界はもう既にフォ



研究開発本部 研究所  
企画部 研究企画室  
七島 祐



アキャストの考えに近寄っているかもしれないので、常に更新していかなければならないと思います。その難しさをとっても感じています。

頭で分かることと、実際に行動できることは別であることにもどかしさを感じています。しかし、チームで取り組みを進めることで、陰ながら周囲の人を巻き込み始めていると思います。サンプル作りを手伝ってもらうことで興味を持ってもらうなど、話を聞いてくれる人が出てきています。

## SDGs委員会による新規ビジネスアイデアの提案

「本業を通じ、社会課題を解決するビジネスモデル」の創出に取り組んできたSDGs委員会は、2020年3月に経営層への報告を予定していましたが、新型コロナウイルス感染の拡大状況に鑑み、10月にオンラインで「提言の会」を開催しました。

その中で、4チームから社会課題の解決と事業の採算性の両立を目指した、当社にとっては新しいビジネスモデルが提案されました。

今回の提案に当たりメンバーは、SDGsや持続可能な社会、バックカスティング\*手法などを学んだあと、チームごとにメガトレンドを考慮したあるべき姿を描き、その実現に必要な戦略としてビジネスモデルをつくり上げてきました。いずれのチームも社内のさまざまな支援だけでなく外部の大学や研究機関、企業、NPO/NGOなどの協力を仰ぎながら検討を重ね、当社グループの既存事業や技術にとどまることなく多様で広がりのあるアイデアを提案しました。

各チームが提言した全てのアイデアは経営層によって審査され、以降の取り扱いや進め方が決定されました。その結果、提言されたアイデアの多くがさらに踏み込んで継続検討することとなり、当委員会以外に生産本部や研究開発本部、事業部門も調査や検討を担当することになりました。

\* バックカスティング：未来を考える上で、目標となるような状態・状況を想定し、その想定から現在に立ち返って、今何をすべきかを考える手法。



## SDGs委員会西日本分科会の取り組み

大阪支店および西日本の4工場からメンバーを募り、2020年7月に西日本分科会を発足しました。さまざまな部署から集まった11名のメンバーで2チームを編成し、コロナ禍で一度も集合できない中、オンラインでの活動に試行錯誤しながら取り組みました。

西日本分科会ではこれまでの委員会同様、基礎的な知識を学んだあと、「当社グループとして現状ではSDGsを当たり前前にできていない」という問題意識を共有しました。その上で、全従業員が日頃から社会課題に対してアンテナを張り、SDGsを自身の行動へつなげるためにはどうすれば良いかチームごとに検討を重ね、2021年3月には推進担当役員やメンバーの上長に対し「SDGsの取り組みを全社活動にする提言」を行いました。

一つのチームは提言の中で、SDGsの取り組みを全社活動にするための四つのステップとして「SDGsを理解する」「リネットックを知る」「拠点を超えて交流する」「ステークホルダーとつながる」を考え、各ステップで実行する10の施策を提案しました。従業員各自への知識のインプットだけでなく、アウトプットすることを通じて行動変容することを期待した施策も考えられていました。

もう一方のチームからは、多くの人がSDGsや社会課題に興味を持ち行動を起こせるようにポイント制度が提案されました。「SDGsを当たり前にしたい」という視点から、さまざまな活動につながるアイデアが出されました。

西日本分科会での活動を振り返ったメンバーからは、新たな学びがあったことや他人事から自分事への変化を実感したなどの声があり、メンバー自身に起きた変革をうかがい知ることができました。



リネットックグループは、SDGsの目標年である2030年に向けて、  
長期ビジョン「LINTEC SUSTAINABILITY VISION 2030」を策定し、  
重点テーマとして「事業活動を通じたSDGs達成への貢献」に取り組むことを掲げました。  
海外グループも含めグループ一丸となって挑戦を続けていきます。



## 社会と共に持続的な成長を遂げていくために

— SDGsを起点としたリンテックの取り組み —

私がSDGs委員会に期待しているのは、  
イノベーションのきっかけづくりです。

足元ばかりを見ず、長期的かつ柔軟な姿勢で  
SDGsに貢献する活動に取り組んでいきます。



リンテック株式会社  
代表取締役社長 社長執行役員  
**服部 真**

リンテック株式会社 取締役常務執行役員  
現SDGs委員会推進担当役員  
**海谷 健司**

2018年2月に発足したSDGs委員会は、SDGsへ貢献する活動を推進するとともに新しいビジネスを創出することを目的にした全社的な組織です。

歴代の推進担当役員である2人が、SDGs委員会が担う役割、そしてSDGsを切り口にしたイノベーションについて語り合いました。

### 私たちの暮らしや仕事において切り離せない存在となったSDGs

**海谷** SDGs委員会が発足してから2年が過ぎました。この2年の間に社会の価値観も変わり、SDGsへの関心はますます高まっているように感じます。

**服部** そうですね。環境の問題などもより身近になってきているように思います。プラスチックごみなどもその一つ。私たちの身のまわりにあるプラスチックがごみとなって海に流れ込み、生態系に大きな影響を及ぼしています。このようにかつて資源の流れは消費するだけの一方通行でしたが、最近では持続可能な循環型へと変化しつつあります。



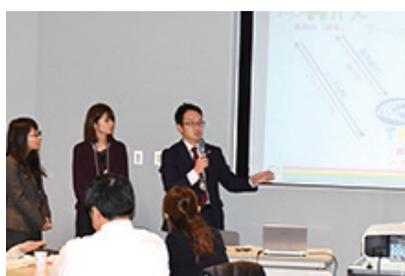
リンテック株式会社

特集：SDGs対談

**海谷** そのような変化はビジネスでも同じです。当社に関係が深い分野では、2019年秋、大手メーカーがプラスチック製のPOPラベルを全廃すると発表して社会の関心を集めました。プラスチックごみや廃棄時のCO<sub>2</sub>削減などがその理由です。

**服部** 半導体メーカーなどでもSDGsを意識した取り組みを積極的に進めています。これらのお客様は、リンテックのようなサプライヤーにも同様の取り組みを求めており、サプライヤーを評価する項目に環境対応などを盛り込んでいます。これらの取り組みが遅れていると取引が不利になり、場合によっては取引を失ってしまうことにもつながります。

**海谷** SDGs委員会がスタートした頃、私自身、SDGsについてはあまり理解していなかったように思います。それは当社の多くの従業員も同じだったのではないのでしょうか。それが最近では、私たちの生活や仕事にとって切り離すことのできないテーマになっています。今感じているのは、SDGsが当社の中にイノベーションを生み出していく、新しい切り口になるという手応えなのです。



## イノベーションを生み出すのは、「なぜ？」という発想とやり抜く力

**海谷** 当社では、中期経営計画にLIP(LINTEC INNOVATION PLAN)という名称をずっとつけてきました。しかし、そのイノベーションがなかなか起こりにくい会社になっているのではないかと心配しています。

**服部** それは私も感じています。長年にわたって培ってきた技術や製品に捉われすぎて、新しいチャレンジが生まれにくくなっている。技術開発や製品企画面ばかりでなく、仕事のさまざまな場面で自分たちの可能性を狭めてしまっているのではないのでしょうか。従業員の皆さんには、そのことに気付いてほしいと思っています。

**海谷** 実は可能性を秘めている技術なのに、新しい発想が出ないために、埋もれてしまっているものも多いように思います。イノベーションには外部から技術や発想を取り込む手法もありますが、それではなかなか社内に根付かせるのが難しくなります。社内に埋もれている技術を発掘して、新しい価値を見出す手法を大切にすべきです。そのような活動を継続的に積み重ねていくことが重要だと考えています。その新しい切り口となるのが、SDGsへの貢献だと思っています。



リンテック株式会社

**服部** 少し個人的な話になりますが、家庭で話をしてもSDGsという言葉はなかなか出てこないのではないのでしょうか。しかし、例えばごみの分別などで「ペットボトルのラベルが剥がしにくい」といった話はよくします。そこで「リントックの技術で解決できないの?」といった話題になることがあります。イノベーションを起こすために大切なのは、この「なぜ?」という発想です。私は、従業員の皆さんが職場でも家庭でも、このような会話が自然に生まれてくるような風土をつくっていきたくと思っています。それに加えて、イノベーションに欠かせないのは「やり抜く力」です。

## 10年後の“あるべき姿”を見つめ、SDGsへ貢献する活動を継続していく

**服部** 海谷本部長は、2020年度からSDGs委員会の推進担当役員を引き継ぎました。今後、どのように活動を進めていきたいと考えていますか?

**海谷** そうですね。私は、SDGsへの貢献は企業にとって社会への本気度のようなものが試されるテーマであると感じています。当社では、服部社長が「SDGsを経営に組み込んでいく」と明確に表明されていますから、その想いを揺らぐことなく受け継いでいきたいと思っています。

**服部** その言葉は、SDGs委員会が発足した時から推進担当役員としてずっと言い続けてきました。今後も変わることはありません。



**海谷** 今、当社では、2030年を見据えた長期ビジョンの策定を進めており、これからは10年後の目標に向かって、3年ごとの中期経営計画を柔軟に推進していくこととなります。私は、SDGsも同じように長期的かつ柔軟に取り組んでいくべきものだと考えています。あまり前のめりになってしまうと、足元ばかりを見た活動になってしまいます。本来、SDGsはそのような取り組みではないと思うのです。

**服部** そのとおりですね。従業員の皆さんには、10年後の企業としての“あるべき姿”を常に意識して日々の活動に向き合っていてほしいと思います。そのような姿勢から、イノベーションが生み出されていくのです。きたいと思っています。それに加えて、イノベーションに欠かせないのは「やり抜く力」です。

